

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18530744

研究課題名（和文） 軽度発達障害幼児の保護者支援プログラムの開発と支援システムの構築

研究課題名（英文） Development of the parent support program for the infant with developmental disorders and the construction of the support system

研究代表者

松崎 博文（MATSUZAKI HIROFUMI）

福島大学・人間発達文化学類・教授

研究者番号：40114003

研究成果の概要：

発達障害児に対する関心が寄せられている中で、本研究では就学前の発達障害幼児とその保護者への支援を目的として福島大学内に早期支援室（「つばさ教室」）を開設し幼児への個別支援と保護者へのペアレント・トレーニングを実施した。その実践の一端については教大協の研究集会（熊本大学）で発表した。また福島大学附属特別支援学校の発達支援相談室「けやき」と連携して、ミドルテネシー州立大学（MTSU）の早期支援センター「プロジェクト HELP」の関係者を招き国際シンポジウムを開催し、早期発見と早期支援の重要性を関係各位に提言した。支援システムの構築については福島市教育委員会（就学指導審議会）と連携して発達障害幼児の就学指導の在り方や学校教育への移行支援の在り方について課題を整理した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	690,000	3,990,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：特別支援教育、子育て支援、保護者支援、プログラム、支援システム

## 1. 研究開始当初の背景

近年軽度発達障害児に対する関心が各方面から寄せられているが、とりわけ就学前の軽度発達障害児の保護者に対する理解啓発と正確な情報提供が急がれている。特に1歳半健診や3歳児健診で障害が疑われる子ども（ハイリスク児）が発見されても、何ら適切な支援を受けないまま就学を迎えるケースが多い。その結果、就学直前になって保護者が慌てるケースが多く、就学に際して不安と混乱が生じ最終的に就学指導審議会の判

断に従わないケースが多く見られる。

こうした保護者に対する就学前の支援体制の不備や遅れが、結果的に適正就学を妨げている大きな要因になっていると考えられる。とりわけ障害に気づきにくい軽度発達障害児の早期発見と早期支援は喫緊の課題となっており、中でもその保護者に対する正しい情報提供と早期からの支援が急がれている。

## 2. 研究の目的

こうした現状を踏まえて本研究では、就学前の軽度発達障害児（ハイリスク児も含む）の保護者への支援を目的とした支援プログラムの開発とその支援システム（福島市をモデル地区）の構築を目指した。

### 3. 研究の方法

(1) 軽度発達障害児の早期支援に関する文献収集と先行研究の調査

(2) 福島大学内に発達障害幼児とその保護者を対象とした早期支援教室（通称「つばさ教室」）の設置

(3) 発達障害児に対する理解推進と早期支援システムの構築に向けた講演会やシンポジウム等の開催

(4) 保護者を対象とした就学前のニーズ調査とペアレント・トレーニングの実施

(5) 教委、保育所、幼稚園、学校等の関係機関との連携システムの構築

### 4. 研究成果

(1) 早期支援教室（「つばさ教室」）の開設  
発達障害幼児とその保護者に対する早期支援を目的に「つばさ教室」を開設し、発達障害幼児とその保護者に支援を行った。「つばさ教室」は5月から12月までの第1・第3水曜日の午後実施し、療育のセッションは前期5回、後期5回の計10回を1クールで実施した。療育開始前に保護者に「家族の希望リスト」を提出してもらい、「生活面」「対人関係面」「学習面」で6ヶ月後、1年後までに子どもに出来るようになって欲しいことを書いてもらうなど、親の要望や個々の子どもの実態に合わせて個別指導計画を作成した。教室の支援スタッフは研究代表者（1名）・連携研究者（2名）の3名の教員と学生・院生（約10名）から成る。支援は発達障害幼児を対象に早期支援を行う「幼児教室」と保護者（母親）を対象に支援を行う「母親教室」を同時並行の形で開設した。

その結果、開設以来22組の親子が参加し平成21年3月末までに15名の幼児が就学期を迎え、1名を除き全員が通常学級に就学した。「つばさ教室」に参加した期間は親の転勤等で最短4ヶ月、最長2年であった。

幼児教室では次の3つの柱を目標に支援を行った。

ソーシャルスキルの育成（Social Skills Training ;SST）

学習スキルの育成（個別課題の指導）

日常生活スキルの育成（Living Skills Training ;LST）

母親教室では以下の4つを中心に支援を行った。

発達障害児についての基本的な理解  
家庭や幼稚園・保育所での困った行動への対処法

日常生活技能の育成（ホームワークの提示）

就学に関する情報提供と就学相談

### (2) 母親教室での成果

母親教室に参加する保護者は医療機関等の紹介で来ている者が多く、意識もそれなりに高く、我が子の障害の受容についてはある程度は出来ているが、多くの母親が「障害告知」の段階で診断名だけが告げられ、その後の子どもの成長の見通しや具体的な支援方法等についてのアドバイスがなされていないことへの強い不満や、専門家への不信感が共通して指摘された。また、子どものソーシャルスキルの乏しさを異口同音に訴えた。さらに就学を控えて、子どもの問題行動や登下校の安全を図る指導等が緊急な課題となっていた。特に就学を目前に控えて就学に関する関心が強く、就学先を視野に入れた教育相談や就学指導に関する情報提供の必要性が痛感された。そこで「母親教室」では、こうした母親の悩みや要望に応え、個々の子どもの問題行動等を出し合い、それを共通課題として解決策を模索してきた。

その結果、これまでの実践研究から母親教室での成果として以下の点が挙げられた。

我が子の障害の受容が出来た。

我が子を客観的に見れるようになり、母親の精神的安定が図られた。

子どもの問題行動の原因やその背景が理解できるようになった。

就学（先）についての見通しが持てるようになった。

将来についての夢や希望が持てるようになった。

同じ悩みを持つ仲間が出来、親の会にも入会出来、子育てへの希望が出てきた。

専門機関や相談機関を紹介してもらい不安が少し解消できた。

教科の学習よりも日常生活の基本的行動様式の習得が先決であることが理解出来た。

以上の結果から、母親は互いの悩みや情報を共有し、育児や家庭での養育について見通しを持って取り組めるようになり、就学や将来への不安を和らげることが出来た。そして何よりも、我が子を客観的に見れるようになり、母親の精神的安定が図られた点が大きな成果であった。

(3) ペアレント・トレーニング  
平成19年度の入室者は7名（男子6名、女子1名；年齢3～5歳）で、その内訳は高機能自閉症3名、注意欠陥多動性障害（ADHD）2名、広汎性発達障害（PDD）1名、軽度知的障害1名、と対象児が多様化したことに伴い母親教室の支援方法について再検討を行った。そこで就学前の二

ズ調査を実施した結果、障害種は違っても、保護者の共通する悩みは「指示をきかない、守れない」「不注意や多動」「衝動的な暴力や危険な行動」などの行動マネジメントに関することが多かった。そこでこうした子どもの問題行動や母親の要望を踏まえて、ペアレント・トレーニングを導入することにした。

19年度は途中でやめた幼児1名を除く男子5名、女子1名の6名で実施し、20年度は継続して参加した1名に新たに入室した4名を加えた計5名で実施した。ペアレント・トレーニングは8回を1クールとして以下のような概要で実施した。具体的には子どもの行動を「して欲しい増やしたい行動」「して欲しくない減らしたい行動」「許し難い危険な行動」の3つに分類し、「望ましい増やしたい行動」が出たらほめる（肯定的注目）ようにし、「して欲しくない減らしたい行動」に対しては無視し、「無視出来ない危険な行動」にはタイムアウトを使い強いメッセージを伝えることを共通理解し実行することにした。

#### <ペアレント・トレーニングの概要>

ペアレント・トレーニングの原理と基本技法（ペアトレの概要）  
子どもの行動を3つに分類する  
困った行動のパターンを知る  
「ほめる・無視する」の使い分け  
「予告と取り引き」の効果的な使い方  
無視するのが困難な場合の対処法  
タイムアウトの方法と使い方  
セッションの振り返り

その結果、ペアレント・トレーニングの終了後、母親からは次のような感想が寄せられた。

困った行動が減ってきているので、子どもを怒らずに過ごせる日が増えた。子どもの良い点を見つけられるようになった。

スケジュールの意味が少しずつ理解できた。

怒るのではなく無視・タイムアウトすることの大切さが分かった。

親のイライラが減ってスムーズに対応出来るようになった。

また子どもの変容についても、以下のような改善点が挙げられた。

いすに座って話を聞けるようになった。

集中して課題をやれるようになった。

兄弟、友達との関係がよくなった。

事前通告などで行動を抑えられた。

ほめられると嬉しくて頑張るようになった。

待てるようになった。

以上の結果から、発達障害幼児の母親に対

するペアレント・トレーニングの有効性が確認された。

#### (4) 保護者支援プログラムの重要性

保護者支援プログラムの開発を目指して、その一環として福島大学内に早期支援教室（「つばさ教室」）を設置したが、そこでの実践研究から以下の点が明らかになった。

発達障害幼児への支援とその保護者への支援が早期支援には不可欠で、この両者に対する支援は「車の両輪」の関係といえる。

保護者支援プログラムの主要な柱にペアレント・トレーニングを位置づけたが、その必要性和有効性が確認された。

「つばさ教室」は保護者にとってはピアサポートの場ともなって重要な機能を果たしており、保護者支援にはこの種の早期支援教室が不可欠である。

子どもの障害受容と母親の精神的安定を図るためにも「つばさ教室」のような早期支援教室の設置が必要である。

19年度にペアレント・トレーニングに参加した保護者（6名）にアンケート調査をした結果、「つばさ教室は役に立ったか？」という質問に対して5名が「かなり役に立った」と回答し、1名が「いくらか役に立った」と回答した。また、「ペアレント・トレーニングにより子どもの行動は改善したか？」という質問に対しては、「かなり改善した」（2名）、「いくらか改善した」（3名）、「無回答」（1名）と、ペアレント・トレーニングが著効を挙げるまでには回数を増やすことや継続して支援していくことの必要性が指摘された。

#### (5) 早期支援に関する国際シンポジウム

福島大学附属特別支援学校の発達支援相談室「けやき」と連携して平成19年12月に国際シンポジウム（「これからの特別支援教育～就学前に必要な支援とは何か～」）を開催した。福島大学の姉妹提携大学であるミドルテネシー州立大学（MTSU）から研究者を招き基調講演とシンポジウムを開催した。講演では「米国における就学前教育の考え方」及び「テネシー州における就学前支援の現状」について2人の研究者に報告してもらった。シンポジウムでは福島大学附属特別支援学校の「けやき」と福島大学の「つばさ」教室の現状を報告し、ミドルテネシー州立大学の早期支援センター「プロジェクトHELP」の所長から、そこでの活動について報告してもらった。講演及びシンポジウムでは活発な質疑が交わされ、発達障害幼児に対する早期支援の重要性と関係機関との連携、支援システムの構築の必要性が指摘され共通理解を深めることが出来た。

MTSUのプロジェクトHELPの取り組みについては学ぶ点が多く、得られた資料等を参考

に福島大学の「つばさ教室」や附属特別支援学校の発達支援相談室「けやき」でも一部導入している。

#### (5) 支援システムの構築

支援システムの構築については、福島大学内に開設した「つばさ教室」を核に学内及び学外の関係機関との連携を図るべくシステム作りに取り組んだ。

##### < 福島大学内の支援機関 >

福島大学早期支援教室(「つばさ教室」)

福島大学附属特別支援学校・発達支援相談室「けやき」

福島大学総合教育研究センター・「附属臨床心理・教育相談室」

福島大学附属小学校・少人数支援室「ほっとルーム」

福島大学附属幼稚園・「子育て支援室」

福島大学附属中学校・「教育相談室」

「つばさ教室」と福島大学の附属4校園の支援機関との連携は比較的スムーズに取れ、必要に応じて総合教育研究センターの「臨床心理・教育相談室」の協力も得られる支援体制の構築が出来た。具体的には「つばさ教室」に参加した幼児が就学後も引き続き附属特別支援学校の発達支援相談室「けやき」で支援を受けるなど、大学の附属機関の特性を生かした移行支援が可能になった。大学の各支援機関をフルに活用したシステムの構築は可能になったが、学外の支援機関との連携が今後の課題である。

福島市をモデル地区とした場合の連携支援機関として下記の機関が挙げられる。

##### < 福島大学外の支援機関 >

福島市教育委員会(就学指導審議会)

福島市教育実践センター

福島県養護教育センター

福島県発達障がい者支援センター

福島県教育センター

福島県東北保健所

福島市保健福祉センター

福島市内の保育所・幼稚園

福島市内の公立小・中学校

教育事務所(県北・県中・県南・いわき・相双・会津・南会津)

親の会(ADHD親の会「とーます」)

医療機関(病院・クリニック)

特に福島市をモデル地区とした場合、福島市の就学指導審議会、市内の保育所・幼稚園、公立小学校(特に困難校)、福島市保健福祉センター、親の会等との連携・ネットワーク作りが急がれる。

そして最終的には福島県全体をカバーする県内の各保健所、福島県発達障がい者支援センター、福島県養護教育センター、福島県教育センター、各医療機関、県内7つの教育事務所等と連携し、福島県内の支援ネットワークを構築していく必要がある。

この点に関しては今後の課題である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計2件)

昼田源四郎・村田朱音・鶴巻正子・松崎博文、発達障害早期支援「つばさ教室」でのペアレント・トレーニング-1年間の評価と課題-、福島大学総合教育研究センター紀要、査読無、第5号、17-24、2008。

昼田源四郎・鶴巻正子・松崎博文、ミドルテネシー州立大学・読み書き障害センターの地域貢献・教育・研究活動、福島大学地域創造、査読無、第18巻、第1号、63-72、2006。

##### [学会発表](計1件)

松崎博文・昼田源四郎・鶴巻正子、発達障害幼児の保護者支援の在り方と課題-福島大学「つばさ教室」でのペアレント・トレーニングの取り組みから-、第26回日本教育大学協会全国特殊教育研究部門合同研修会、2007年11月22日、熊本大学。

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

松崎 博文 (MATSUZAKI HIROFUMI)  
福島大学・人間発達文化学類・教授  
研究者番号：40114003

##### (2) 研究分担者

##### (3) 連携研究者

昼田 源四郎 (HIRUTA GENSHIROU)  
福島大学・人間発達文化学類・教授  
研究者番号：40282248  
鶴巻 正子 (TSURUMAKI MASAKO)  
福島大学・人間発達文化学類・教授  
研究者番号：40272091